

会 議 録

- 1 会 議 名 第 3 回北九州市次期教育プラン検討会議
- 2 会 議 種 別 市政運営上の会合
- 3 議 題 次期「北九州市教育プラン」の内容について
- 4 開 催 日 時 令和 6 年 4 月 1 5 日 (月) 1 0 時 3 0 分 ~ 1 2 時 0 0 分
- 5 開 催 場 所 小倉北区役所東棟 8 階 8 1 1 ・ 8 1 2 会議室
(北九州市小倉北区大手町 1 番 1 号)
- 6 出 席 者 構成員 8 名、教育長、教育次長、事務局

7 会 議 経 過 (発 言 内 容)

(1) 開会及び教育長あいさつ

本日は大変ご多忙の中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

教育委員会を代表いたしまして、ごあいさつを申し上げます。

北九州市のまちづくりの新しい方向性を示す「新ビジョン」が先月の議会で可決され、この新ビジョンと歩調を合わせる形で、新たな「教育大綱」も 4 月 1 日に策定されました。本市ではこれから、「こどもまんなか」で質の高い教育環境の充実に向けて取り組んでいくこととなります。

この会議で検討している次期「教育プラン」は、新たな「教育大綱」が示す基本的な方向性を具現化するための実行計画であります。これまで 2 回の会議で熱心な議論と貴重な知見をいただき、骨格まで作ることができました。本日は、より具体的な内容を議論いただき、その結果をとりまとめた後、パブコメを経て 8 月頃の策定へと、作業を進めてまいりたいと思います。

前回の会議では、時代の要請を踏まえた新しい教育に取り組む必要があるとご指摘をいただきました。その他にも、いじめ、不登校、部活動の地域移行、教職員の働き方、施設の老朽化など、教育現場の課題は山積しているところです。

こうした中で、「教育大綱」に掲げられた、全ての子どもにとって「居心地の良い学校」とは何か、子どもたちの個性や多様性を尊重し、可能性を最大限に引き出すために何をすべきか、教育プランを作るだけにとどまることなく、プランに魂を吹き込み、学校現場や学校を取り巻く関係者と共有しながら、着実に前に進めていくことが必要であります。

ここで、みなさまに共有させていただきたいのが、上田構成員が所属されております新ケミカル商事が、門司区の小中学校で、日本の伝統芸能である能楽の出前事業、あるいはその公演を行っていただいている活動が、能楽で地域活性化や、こどもたちのシビックプライドを醸成するなど、様々な分野に広がりがあるということで、2023北九州SDGs未来都市アワードという賞の中でトップであります、SDGs大賞を受賞されました。

こういう具体的な取り組みというものが、プランをもとに、地域に広がっていくことを、盛り込みたい、こういった広がりがあればなと思いました。

このまちの未来を担うこどもたちのために、次期教育プランを今後5年間の行動指針といたしまして、北九州市の教育をさらに充実させていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(2) 議題 次期「北九州市教育プラン」の内容について

○ 眞鍋座長

今日はプランの具体的なところを作っていくための、非常に大事な会議の場だと思いますので、皆様に忌憚のないご意見をたくさんいただければと思っております。

それでは早速、会議次第に従いまして、議事に入っていきたいと思います。

本日の議題は、「次期北九州市教育プランの内容について」です。主に全体のスケジュール、それから北九州市の教育大綱、今検討しております次期北九州市教育プランの内容を事務局からご説明いただいてから、議論に入っていただければと思っております。それではお願いします。

栗原企画調整課長より説明(資料1～資料6)

○ 眞鍋座長

ご説明ありがとうございました。市長が新たに策定した北九州市の教育大綱、それから検討会議での議論を踏まえて、事務局から資料5北九州市の教育プランの案をご説明いただきました。KPIの案についても示していただきました。これらを議論のたたき台として、次期教育プランに記載する内容、それから、教育プランの進捗を測る上で適切なKPIの設定、それから目標値などを中心に、皆様のご意見をいただきたいと思いますと思っております。

もちろんアンケートの結果など、非常に面白い部分もたくさん出てきていると思いますので、ここからはご意見出し、それから議論等を行えればと思います。

○ 上田構成員

今、言われた事の中で、アンケートが非常に面白いなと感じました。

私どもが頭で考えている事と、こどもが感じていることが、どこかで齟齬があ

ると思われます。その中で2つほど、なるほどなと思ったことがあり、1つは登下校の時に危険を感じるということ。小学生が14%ぐらい、でも中学生になると3割ぐらいのこどもがそう感じているという事で、この数字は安全安心の観点からすると、無視できないのではないかとこの事と、これは大人というか社会の責任かなという感じがしているので、思っている以上にこの事に注力をすべきじゃないかということを感じています。

もう1点は、先生のアンケートの中で、5年前に比べて劣っているところが、1番が体力で、2番目は学力ということです。これは、他のアンケートであるように、学校に期待するものの中で、親も社会も期待しているのは、学校におけるこどもに対する基礎知識の教育と、社会を生きるための体力、これはすべての問題においての基本的なところだと感じるので、それがなければ、教育プランに掲げられているような積み上げというのは、非常に難しくなるんじゃないかと感じております。それを教師の方が肌で感じて、5年前よりも劣っているというところに、我々が解決をしなければならぬ根本的な問題があるんじゃないかなというのが、まずアンケートに関する私の感想です。

○ 眞鍋座長

確かに登下校の問題は、非常にシリアスに考えないといけない問題だと私も思いましたし、先生のアンケートの、劣っている部分についても、非常にベースになる部分ですので、何とかしなきゃいけないだろうなと思えました。

このことについて、ぜひ宮口先生にお話を伺いたいんですけども、コグトレとかをやられていて、こどもたちの認知の能力が下がっているんじゃないかとか、そういうことはあるでしょうか。私はあまり詳しく知らないのですが、教えていただきたいです。

○ 宮口構成員

今、上田構成員が言われた特に前半のところは、私もとてもびっくりしたというか、これは無視できないなと思っています。特に登下校のときに怖いというのは、それだけで少し学校に行きたくないというふうになってしまいますし、いろいろな面に対応が必要だろうなと思っております。

それと先生方が、どんなときにウェルビーイングを感じますかという問いに、こどもたちの幸せ感というか、そういったところに接するとき、ということがございました。ここに今、眞鍋先生が言われたように、こどもたちが、例えば学力が伸びたりとか、いろいろな面で力を発揮したりとかという場面が見られると、先生方の学校でのウェルビーイングが高まってくるだろうなと。これが報酬になっているのがよくわかります。

この3年間、研究させていただいたときに感じたのが、先生の話が残ってな

い、話をなかなか覚えてないということの割合が結構多かったんですよね。北九州だけなのかと、思っているいろいろな学校を回らせていただくと、どうも最近の子どもたちが、先生が言ったことを覚えてないという割合がとても高くなったという話を、至るところで聞いたことがあります。

おそらく、私の個人的な考えですけれども、非常に視覚支援が進んでいて、聞かなくても文字が視覚から入ってくる、という状況が当たり前になってきています。

当然、特別支援学校とかも行っていて、視覚支援をする大切さというのは、学習を進める上ではとても大事なことで十分承知をしているんですけども、一般社会に出た途端に、聞かないといけない場面というのはたくさん存在していて、その応用が、例えば国語であったり、社会であったりとかということに繋がってくるのではないだろうかと思っております。

その話を進めていくと、最終的にコミュニケーション力になってくると思うんですが、その根本にある、基本的な学力の元になっている、聞いたり、見たり、覚えたり、私たちがコグトレで重視をしてきた内容が、明らかに、皆が皆そういうわけではございませんけども、一定数非常に難しく、それが中学生になってもなかなか改善しないという割合が、私の印象では2割弱ぐらいですかね。アンケート結果でも、学校の授業がつまらないって言った割合が、中学生の方が増えてきているというのは、そういったところにも影響があるんじゃないかと感じたところであります。

○ 窪田構成員

本当に貴重なアンケートの結果、ありがとうございます。

今の話にちょっと関連しますが、授業が難しいと言ってる子たちが8割以上いるというのも今、力が落ちているのに関連していると思うんですけども、先生に相談できないとか、相談したくない子どもが4割以上という、これかなり衝撃的な数字ではないかなと感じました。先生以外の大人に相談できない子が4分の1ぐらいで、この中では、先生に相談できている子がいるかもしれないと、希望的なお話もありましたけど、要は全体の4分の1の子が相談できる大人がいない。でも実は学校の授業は難しく、その先生には4割の子が相談できない。これはかなり致命的なことかなと非常に衝撃を受けました。

それから失敗が怖いとか、周囲に合わせてしまう。これが4分の1ぐらいいるんですよね。8割ぐらいが学校に行くのが楽しいというふうに見えますけれども、主にこの友達との休み時間の触れ合いみたいな事が大事で、全体で見ると4分の1ぐらいの子どもたちは、授業や先生との関係に困難を抱えていて、チャレンジもできないし、周囲に合わせていて、かつ相談できないということも、これだけいるということが非常に見えたので、今回誰も取り残さない、すべてのこ

どもにとっての居場所とかそういうキーワードが出ているので、ぜひ具体的にこういう4割ぐらいの、学校の中で苦戦している子どもたちが安心安全で本当にチャレンジできるような形にもう少し盛り込めればいいなとすごく思いました。

○ 友納構成員

貴重なアンケートをありがとうございました。

私が外来で必ず聞くのは「相談できているか」です。これがないと人は孤独を感じてしまい、不登校になりやすくなります。相談できない場合が何種類かありますが、プレゼンをすること、相談する文章にすることが難しい場合や、相談する勇気が持てない場合や、相談できる雰囲気乏しい場合もあります。そういう時は保護者を介して相談するように伝えていきます。お母さんから連絡帳に書いていただくなどです。それができるようになると、元気になっていく子どもが多いです。できない場合は、どこか別のところに相談ができるように、学校の先生に相談できるようになるのを増やしていただきつつ、相談が誰にもできないという数字を必ず減らしていただきたいです。メンタルヘルスの基本なので、ぜひお願いしたいです。

学校が怖いところ、トイレに行くのが怖いということに関して、トイレが怖いという子どもが外来にいます。実際何が起こるかということ、朝一杯お茶飲んだあとは飲まず、学校のトイレに行かないようにします。そして家に帰ってきてから水分を取る子どもが、年に数人います。そういう子どもに対しては、保健室や職員用のトイレを使えるようにしていただくとか、トイレは何とかしていただきたいと思います。

体力、能力のところですが、子どもたちはゲームをたくさんしていて、公園に行ってもゲームをしている、という子どもが増えています。視覚が強くなってしまい、話を聞く力が減っているのも、ゲームの影響が強いのだらうと思います。ゲームの対策は何とかならないといけなだらうと思いました。

宿題ですけれども、宿題が一律に出ていることに関して、親子の葛藤が強すぎて、私たちドクターも困っているところがあります。1つは、勉強が難しいからできないという方と、1日学校で疲れてきているのにさらに夕方に宿題をすることができないという方と、あと帰宅後、家族が多いご家族で、家族どうして好きなテレビのチャンネル争いが発生したりと、宿題をする環境が整わないという方など、一律の宿題は厳しい方が多く、親子の関係が破綻するときがあります。ご家庭の背景もあるから、宿題に関してはちょっと柔軟にしていきたいというのが、私たちドクターの現場の声です。しっかり宿題ができる子どもはいますが、そうでもない子どもが多くて、そういう方々が私たちのところで宿題の葛藤を言われます。他県とか海外では宿題がないとか、減らしたとか、先生の残業が減りましたとか、こどもの声をよく聞くようになりましてとか、宿題を減らす

といい面もあるというのはちょっと見聞きしましたので、お願いできればと思います。

○ 眞鍋座長

様々な観点から、ご意見ありがとうございます。

1点お聞きしたいんですけど、最初におっしゃった相談がしにくい子どもについて、1つは子どもが自分の意見を言語化しにくいとか、何かこう声に出しにくいとかいろいろ理由があるかもしれないけど、子どもに起因する理由と、環境に起因する理由があると思うんですけど、何か先生のご意見としてどういうふう改善すればそれがよくなると思われませんか。

○ 友納構成員

子どもはすごく敏感で、周囲の人の表情とか動きをよく見ていて、ドアを閉めるその音で今日先生怒ってるな、とかがわかると言います。先生のウェルビーイングの重要性を思います。お母さんに関して、お母さんが車で帰ってきて車のドアを閉める音で、お母さん今日怒ってるなと、わかると言います。子どもたちが周囲の大人の行動を敏感に感じとっている、というのがこの仕事をするようになってわかりました。私たち大人が、自分自身のメンタルヘルスを改善していくことが必要だと思います。

困りごとを言えない子どももいます。そういう子どもに対して周囲の大人はどうしているかということ、周囲の大人はその子どもの表情を見て、何か困ったことはないですかと声をかけています。そうすると困りを言う子どもが増えるので、先生方には声をかけるということをしていただくと助かります。

○ 窪田構成員

アンケートの中で、先生に大切にされてると感じますかという項目があって、ここはですね、よく感じると感じるを合わせると8割以上なんです。つまり、先生が余裕がなくて冷たいから相談できないと必ずしも言ってるわけでもなくて、ただすごく自尊感情の低い人ほど相談できないとか、それから抑うつ強い人ほど相談できないということがあることを考えると、今先生がおっしゃったことも含めて、子どもの側の、やっぱりその病んでいるというんですか、非常に自分に自信がなくて、こんなことを相談してもという部分もすごく大きい。8割以上の子がそういうふうにちゃんと感じているというのは、そこに希望の持てる理由もあります。それと今、友納先生がおっしゃったように、私も研修で、こちらから声かけて、「何かあったら聞くから言って」ではなくて、「また声かけるよ」と言って、大人の方から声かけないと、なかなか子どもの方から「実は」とは言えませんという話をよくしてるので、すごく共感しました。

○ 宮口構成員

相談できないというところ、非常に私も賛同しております。なぜかといいますと、少年院の少年たちとプログラムで関わってきたんですけど、ほぼ全員相談できません。できないというか、してこなかった。「相談って何？」という感じがございました。私も相談できないということが非常に大きなポイントのひとつだと思っていて、それができるためにはどうしたらいいのかなということをいろいろ考えてきたんですけど、1つは、例えばジレンマが生じた、自分が困ったという経験をしたときに、困ったら自分1人で解決できないので、人に相談してみよう。相談した結果、うまくいかなかったり、例えば、さっきみたいにドアを閉める音で怒っていることが分かったり、いろいろな経験があって、相談する機会を逃してしまったという経験もあると思いますし、良い回答を得られなかったということもあると思います。ただ、私はその根本にあるのが、実はこの学習能力なんかに関連していると思うんです。

人に相談すると、例えばこの委員の中でいけば、私が例えば非常に困ってる事項があったと、ちょっと相談すると、先生方の意見を全部覚えておけば、例えば5通りとか10通りの解決方法が自分の中に取り入れることができると思うんですよね。だけでも、もしちゃんと覚えとく力がなかったら、人の意見をちゃんと自分の中に取り込むことが難しくなってくると思っております。だから相談するにも、人の意見をちゃんと聞いてそれを自分の中に取り込んで、そしてそれを試してみるという経験がもしかしたらなかったんじゃないかと思っております。そういうふうなことでプログラムの中に入れたりとかするようにしています。

それも1つの方法ではないかと思っております。まずジレンマを感じたときに、困った経験は自分の中で表現をするという経験を、してきたかどうかそれを聞いてくれる人がいたかどうかとは非常に大きなポイントの1つだと思っております。困ったことをちゃんと言語化できるところがまず第1のステップであって、そしてそれを解決するのは、次のステップだと思うんですけども、もう解決するときには人の意見を聞いて、それを試してみるということとか、経験としてやってこなかったこともたちの数が結構多いんじゃないかなというところは、今までの経験の中で感じています。

少年院の少年たちは、全部自分で解決しようとして、行き詰まっているいろいろな事件を起こしてしまったりとか、暴力に至ったりとかという経験が余りにも多いなということで、本来だったら、相談する相手がしっかりいたら、事件には至らなかったというケースも多々あったと思います。

○ 鶴見構成員

コミュニケーションがとれないという話、私の学校での具体例の話をする、授

業中に逃げ出したり、体育館の隅に座り込んでいるとか、そういう子がいたんですね。その子にカウンセラーだったり、看護師の方が話を聞こうとしても、何もしゃべらない。家庭の問題もあったり、本人のいろいろな特異的な問題もあったりしているわけですが、実は、自分のことを表現できないんですね。表現できないために、自分の気持ちを結局違う形で、例えばですけどリストカットとか、そういったことに繋がってしまう。これは残念ながら、たとえ小中学生だけじゃなくて、高等教育の子たちの中にも一定数います。やはり、一番問題の最初は、ずっと自分の気持ちを表現するということがちゃんとできてないままに、どんどん年齢上がって、相談相手が作れないという、そういう点ですね。私が今感じているのは、こども同士のそういったコミュニケーションもあるんですが、こどもと先生の間、先生の方にちょっと責任があると思うんですけども、コミュニケーションのうち、ましてや先生同士、教職員同士のコミュニケーションを持ちたい。いろいろな理由があると思います。こどもたちが、例えば、やることがたくさんあって、ゆっくりとその友達同士で過ごす時間というのが、もう本当に取れない、すぐ家に帰んなきゃいけないとか、部活やったりしなくちゃいけないとか、それから先生は先生で、残業残業みたいな仕事の中で、こどもたちの相手もできない。そういう余裕がない中にコミュニケーション力をつくれというのはちょっとなかなか難しい。もう 1 つは、家庭の中の問題というのが結構学校の方に上がってきてるんですね。こどものストレスのかなり大きいところは、家庭のところ結構あって、それが学校にも言えない、友達も言えないというようなことがありました。ですので、もちろん我々教職員は、傾聴といった訓練というか研修を、いろいろな機会に受けるわけですが、一方で、さっき勇気という言葉がちょっと出ましたけれど、こどもたちも表現するという、その 1 歩を踏み出すという、そういう訓練は、生きる力として、学力をつけるということとは別のところの積み重ねと思ってます。

それから、最初の方で言われた、学校で楽しくない、嫌いになっているところに、授業というのが書かれて、私これ非常にショックなんです。小学校より中学校が増えていて、44%にまで上がっています。もちろん学習の内容が難しくなっていることはあります。一方で、指導要領の内容がどんどん増えていっているという、ゆとり教育から見直されてという背景もあるかと思えます。

一方で、課題の量ですね。授業の課題の量もどんどんそれに合わせて増える。だからこどもたちの勉強する時間というか、費やす時間というのは、年々増えているという印象があって、うちの学校でもそれはちょっと反省しないといけない。昔ながらの、言ってみれば、知識指導型の教育をやっていくとそうになってしまう。他の要素も入れてやっているとは思いますが、成績評価を試験だけで行っていく。主はテスト、この世界からこどもたちが抜けないんです。そういう中で勉強を楽しめというのは無理だと思うんです。

ちょうど 4 月に入学式がありまして、私も新入生を迎えて、皆さん、こどもたち

の前、親の前でいろいろ話をしました。やっぱり学校が変わったり校舎が変わったり、上の学年に進むというのが1つ、自分を変えることのきっかけになります。だから、新しい自分を見つけるというそういう楽しみがある、それをたくさん友達作ってやりましょう。だけど残念ながら5月ぐらいになった時には疲れてくる。しかも、友達同士の中にも合う子と合わない子があるわけで、グループが分かれていたり、いろいろな問題が起きます。こういった波が次から次へと来るわけです。その中で授業は、何となく退屈になって知識偏重になってくると、面白さは全然ないし辛いですね。だから、授業の楽しくないというパーセンテージを減らすため、STEAM教育の中にちょっとヒントがあると、私は思っています。

○ 眞鍋座長

ぜひ、そのヒントのところをもう少し。

○ 鶴見構成員

もう1つちょっと前提があるんですけど、こどもというのは、大人とか親、先生に褒められるから勉強とか部活を頑張るといふ、そういう部分があるかと思います。

つまり、何のために苦しい部活やったり、大変な勉強をするのかといったときに、モチベーションの1つはやっぱり、親が「成績良くなったね」ということを褒めたり、あるいは部活で、すごい大変な思いしたけど、試合で勝てたとか、それを顧問の先生だったり、コーチから褒められたりする。そういったことで、こどもたちのモチベーションが上がりますよね。だけど、本当にそれだけでいいんでしょうか。そうするとそれが終わった途端にその子たちは何もなくなってしまふんです。つまり、自分自身のやりがいとか生きがいとか、そういったものをちゃんとやってく子たちはそこに何かを見つけていくわけですがけれど、もし、外からの評価のみだけでやった場合、それが終わったときに燃え尽き症候群というか何も無い状態になる。だから、こどもたちに一番大事なものは、達成感、それから感動というものがあってほしい。

例えば、授業の中で、ちょっと大変かもしれないけど、一生懸命考えたことに対して、数学の定理なりなんんりの証明をやって出来たという、達成感ですね。こういったものの積み重ね、達成感というものがこどもたちの中に残っていく。それが学校に来て楽しいとか、やりがいがあるということに繋がってくるんじゃないかなと。STEAM教育とは、まさしくその単なる1科目だけじゃなくて、横断型、いろいろな科目や勉強の横断的な学びをする中に、自分がやっていることの意味というんですかね、取り組むこと、解決することで友達と一緒に共創的にやっていくということ、やっていく中で培うと思っています。

○ 眞鍋座長

いろいろな観点から意見が出たんですけど、泉構成員いかがでしょうか。

○ 泉構成員

今の話を受けて、改めて地域や企業の皆様との連携において、こどもたちが学校や親だけではなく、第三者の大人とも出会いそこで相談できる機会や場もすごく大事なんじゃないかと感じました。なぜなら、STEAM 教育では、こどもが人前で話す中身、つまり五感や感情を言語化してみる、その実践を繰り返すするという、そういったトレーニングも大切と思うからです。

また、こどもたちが、聞き手としてのトレーニング、つまり対話の心得も学ぶことによって、意見の違いがある前提で互いを尊重し合える好意的関心を醸成する。こういった人との関わり方も、共創から得られるものに繋がるのかなと感じました。

K P I の設定では、地域の行事に参加するこどもたちの増加を見込んでいますので、今のやり方だけではなく、新しい施策により、こどもたちが繰り返し、様々な大人に出会い、またその経験をこどもたち同士が言葉にしたり、また褒め合ったりという繰り返しにより、アンケート結果に出てきた同調圧力に対する心理的なハードルが下がっていくと良いと思います。

○ 眞鍋座長

重要なお指摘ありがとうございます。なかなかクラスの中で表現する機会というのが意外と少なかったりするのかもしれない。表現することで学びが深くなるということもよくあると思いますので、そういったコミュニケーションに関する教育というのは重要なのかもしれないと思いました。

もう少し時間があるんですが、今日は教育プラン案とK P I の案、この辺りについて決めていかないといけないので、何かご意見とか、もう少しこうした方がいいんじゃないかみたいなどころがあれば、ぜひいただきたいと思います。いかがでしょうか。

○ 窪田構成員

上田構成員が追加意見で出されている、企業によるこども支援の組織化ということがございましたけれども、このプランの最初の、すべてのこどもにとって居心地のよい学校のところの 2 ページ目にある、安心して過ごせる居場所というところが、現時点ではハード面のことを出してもらってるんですけども、学校の中に企業と地域の方が入ってきて、いろいろな活動を展開して下さることで、サードプレイスとしての、いわゆる心の面で、実際にこどもたちが活動に触れて、自分を表現したり発揮できる場所ってことに繋がると思います。この辺りに何かそういうものを書き込んでいただくと、再掲という形でもいいんですけども、居場所

と言った時にただ場所があればいいのではないので、そんなことを思いました。

こども支援の組織化というか、あらゆるところでそういうことが保障されるような展開については、ぜひ方向性をお話いただきたいと思いました。

○ 上田構成員

この教育プランの骨子の中に、北九州市の教育委員会と学校の現場というのがあり、それを補完するものとして地域があり、企業がありというのがよく出ています。私は思っています。従って、地域が何をすべきだから、何をこどもに対して与えて、あるいは企業がどうすれば、北九州市の市民として成長をサポートをしていくということが大切じゃないかなと私は思っているんです。

さっき申し上げた安心安全のところですが、やっぱり登下校において、こどもに安心安全を提供できるのが地域だと思っているんです。その地域がどうなっているのかというと、自治会というんですか、組織率は6割以下になっている現実があるんです。核社会が地域の中で広がっている。地域におけるこどもへの関心というのが、低下してるというのが、現実にはあるんじゃないかなと私は思っています。

従って、そこら辺を教育プランの中で地域の皆さんに、そういう現実と、もっとこどもたちのために地域が頑張らないといけないということが、もう少し鮮明に出た方がいいんじゃないかなという気がしてるのが事実です。

もう1つ、企業の方から言いますと、企業としてこどもたちに何ができるかというのがあって、私は、鶴見先生のところの学校が非常に素晴らしいと思っています。先生がおっしゃられたように、感動をどう与えるかということだと思っています。これもこの世界で、尖ったところをやられているんですが、先生がご指導された中で、チームワークがあり、技術力があり、成功体験を作っていくことだと思えます。企業として我々できることは、こどもたちに対して、そういう成功体験を与えてあげるか、成功をするように指導してあげる、そういったことができれば非常にいいなと思っています。

それでこの北九州市の教育プランの中で、そこら辺ができることが北九州市の強みじゃないかなと私は思っています。だから、いろいろな地域があると思うんだけど、北九州市というのはそういう企業が立地するまちですし、市長は儲かるまちにしたいということだし、そういう観点で企業とタッグを組んで、教育の中に企業の力を入れて、こどもたちに成功体験を作っていくというようなことができれば、非常にいいんじゃないかなと考えています。

○ 眞鍋座長

今のお話伺って、私もこれまで20年弱ぐらい地域と連携した教育というのをやってきたんですが、学生は当然そこから学ぶものがたくさんある一方で、地域の方もたくさん学ぶことがあるんです。企業と学校の連携にも携わってきましたが、学

生は当然学びますけど、企業の方も非常に研修的な機能があると、学びが深くなるということで双方で学びの場ができるので、非常にいいなと思っています。今のご意見、地域との連携というのをどんどん進めていくことは非常に北九州市らしくていいかなと思います。

○ 宮口構成員

今上田構成員が言われたこと、非常に強く賛同いたします。後でご意見が追加されていたのを拝見いたしまして、もう1つ、この企業の他に、教員免許を持ってない人の活用の仕方というのが書かれていまして、非常に多様な経験されてきた地域の方々、そして子どもに対して何かやってみたいって思っている方がたくさんいるというのはあると思ってます。私も今度、高知の大学を任されることになって、地域貢献とかの繋がりの中で、企業の力と市民の力を結集して、分けて考えるのではなく、産学官民全部合わせた連携というものがとても大事だと思っています。その流れの中で、子どもたちを地域を守っていき、そしてそれに基づいて今度そこで働く人たちを作っていくみたいなイメージができればいいなと思っています。

このプランに対しての私の意見ですが、コグトレというか認知的な機能のところを集中して研究をしてきたということもございまして、非認知能力という表現がちょっと誤解されて使われていることがあるので、表現を少し変えたらどうかと思っています。

今のお話の中で非認知力というのは、あくまで認知対非認知力みたいな構造になっているんですけど、両方大事なんです。両方あってこそ、学習能力もアップしていきますし、コミュニケーションしたりとか、学習の基本的な能力もある程度あって、そこに非認知力と言われているような、人間力とか生きる力というのは、当然作られてくるわけですから、土台になるのは両方必要になってくる。ですから学習を進めつつ、社会の中で、生きる力もつけていくということになってくると、やっぱり社会の中で生きていく力というのは、地域でないとかあるいは家庭でないとかなかなか難しいと思います。認知力というのが机上のある力だけを指して、それを認知力と表現して、それだけでは生きる力に繋がってこないぞという意味合いで、この非認知力って言葉使っているんで、そうではなく、やはりこの両方大事ですよという表現していった方が、よりこのアンケートの結果も、基本的な学習というのも高めていくし、社会的な力を高めていくという流れにしていった方が、よりわかりやすいんじゃないかなと思いました。

○ 窪田構成員

付け加えるというより確認になりますけれども、先ほどのコミュニケーション能力を高める上で、様々な地域の方との実際の活動の重要性というご指摘があって、その通りだと思うんですけども、その土台として、コミュニケーション力を直接

的に育てるプログラムが「北九州子どもつながりプログラム」だと思っんです。

実際に、例えばいろいろな表情のこどもの絵を見せて、この人どんな気持ちか、特別支援教育などでやられるようなことが、低学年からどんな気持ちかということを考えてどう声かけをしていくとか、それから、嫌なこと言われたときにそれに対してどんなふうに答えるかということも、基本は子どもつながりプログラムで、学ぶ準備が北九州市には小学校から中学校にかけてありますので、それを土台として、その実践の場として、本当にたくさんの大人や出来事との出会い、地域とかそういうことと関連づけると非常に意味がでてくるかなと思っました。

○ 眞鍋座長

はい、ありがとうございます。

それでは、時間も大分経ってきましたので、そろそろまとめていきたいと思っます。最後にお 1 人ずつ、全体的なご意見とかご感想をいただければと思っております。よろしいでしょうか。

○ 友納構成員

こどもが目標を作って、達成とか成長とかできないときは、成長するのを待っていただきたいです。できないなら、そこは見守っていただきたいです。こどもってやりなさいという、やらないので、「そうね」と言って待っっていると勝手にやりだします。こどもを誰一人取り残さないという言葉は、とてもいい言葉だと私も思っていますので、こどもさんの成長発達に合わせた、個に合わせた支援というのを可能な限りしていただきたいというのが心からのお願いです。個に合わせた支援を通常学級でも可能な限りしていただきますと、最初はできないですが、自分から成長していく場面に私たちドクターは出会います。それを見るのが私はとても楽しみです。学校の先生には持続可能な個別支援をしていただきたいです。無理なものは無理で、そこは保護者との話し合いをしていただきたいです。誰一人取り残さないとはそういうことかなと思っています。

もう 1 つは、先ほど申しましたけども、学校の先生方の仕事量です。働き方改革はドクターもやっっていますので、先生方も是非進めていただけるようにと思っます。

○ 泉構成員

先ほどは、こどものアンケート結果に対する感想だったのですが、私の中でもう 1 つ注目した点は、教職員の方のアンケート結果から、横のコミュニケーションを高めたいというニーズを感じたことです。会議資料が前回からブラッシュアップした箇所に、校務 D X の推進という具体的な記載がありました。ということは、D X 導入の前準備として、風通しの良いルートづくりが必要で、教職員が求めるコミュニケーションの質の高まりの実現にも繋がっっていく。学校現場に対する K P I の設

定により、教職員から子どもたちへの好循環になれば。つまり、子どもたちに対する先生の目配りが更に深まり、学校全体のウェルビーイング向上に繋がっていけばと。プランおよびKPI案の全体像を見てそのように感じましたので、この視点でも、引き続き議論を深めていけたらと思います。

○ 宮口構成員

全体的に非常によく整理されていて、わかりやすくこのプランを作っていただいているなということと、それから構成員の先生方の意見も反映されているなと思います。

あと具体的にこれを進めるとなったときに、どのような話を持っていくのかということでKPIを設定されてきたかなというようなことはよく理解できました。

アンケートを子どもたちにとったということが大きなプラスに働いていているんじゃないかなと思っています。つまり、今後とも継続して、もし新しい何かプランを立てるときも、子どもたちは子どもたち、それから家族、先生たちの意見を反映できるような形で進めていただけるといいんじゃないかなと思いました。つまり、5年ごとに、もしかしたら、こういった同じ項目をやったときに、変化が起こるとすれば、その原因は何だろうという考察ができるんじゃないかなと思いました。詳しい中身については、1つ1つ細かくというよりも全体的に非常にわかりやすくなっているなと思っております。

キーワードのひとつは、やはり地域との繋がりだと思いました。おそらく北九州市は非常に大きな企業のリソースと、それから人的なリソースもたくさんあると思っています、これを活かせるということが非常に大きなモデルになってるんじゃないかなと思います。ぜひこの辺で、特徴的な何かが前面に出るような作り方をされた方がいいんじゃないかなと思いました。

非常にフラットに全体的に網羅されてるので、非常にいいと思うんですけど、特にここが特徴ですよというふうな見せ方をすると、説明されるときもわかりやすくていいと思いますので、最終的にまとめるときにはその辺のコントラストをしっかり出していければいいんじゃないかなと思います。

○ 鶴見構成員

まず、教育プランにつきましては、私もいろいろとご提案させていただいたことが、非常にうまくまとめられていると思います。

私は、学校というものがクローズした、学校だけで教育をする、育てるというような場じゃない、もう時代がそうじゃないということ、皆さんと認識を共有させていただいて、地域丸ごと、これも教育の場なんだと認識を変えることが大事じゃないかなと思います。本校でも、建物改修をやっている中の1つに、福祉施設のようにアクティブコモンズというのを整備しようかと。今、九工大さんにありますけ

れど、そういったものを整備して、地域の近くにある小学校の子たちが放課後來て、お兄さんお姉さんたちと触れ合ったり遊んだりできる場みたいなのが作れないかなというふうに思っていて、図書館だとどうしても思いっきりできませんので、そこはもう、いろいろなものを飲み食いしながらワイワイやる場所にしようというような計画をしています。そこに、地域の人、それから企業の方が入っていただけたらいいかな。それを各小中学校でやるのは難しいかもしれませんが、そういう場が開かれたら、安全面の部分は確保しないとイケませんが、そういう場がくれたらいいんじゃないかなと思います。

コミュニケーションの話在先ほどしましたけれど、やはり何よりも大事なものは何かと言ったら、子どもたちに関心を持ってんだというメッセージじゃないかと思うんです。つまり大人が、周りが、あなたのことに関心があるんですよと、常日頃メッセージとして発信する。要するに、単に授業のときだけ、あるいは課外活動のだけの関係ではなくて、日頃通学してるときにも、ちゃんと君のことに関心があるんだよって言っていると、何となく子どもたちというのは、何かのときにふと話しかけてきたり、先生も変化に気付くし、地域の人も名前や顔をわかってる子ですから、変化に気づきますよね。それが安心安全な場なんじゃないかなというふうに考えています。そういうようなことを北九州市がしっかりといろいろな学校で実現していただいたならば、安心安全な学校づくりができると思います。

○ 窪田構成員

本当に網羅的に大切なことが盛り込まれていると思います。今日、特に話題になっていた、地域との連携といいますか、企業や地域ということは、先ほど私が非常に懸念している、例えば相談できない、挑戦できないとかいう子どもたちが、そういう様々な方とかに活動とかで出会って、その中で、達成感を感じたりするということにも繋がりますので、いろいろな問題を改善することに非常に役に立つことだと感じています。

そうは言いながら、以前から申し上げている、学校にきちんとコーディネートする専門人材みたいな人が配置されないと、非常に先生方も忙しくて、ウェルビーイングも損なわれると思います。いつもお金のかかる話なので難しいとされていますが、そのあたりも書き込まれてはいますけれども、先生方の、「どうしたらいいんですか」というところに対応することや、教職員の増加とかクラス人数の減少とか要するにたくさんのマンパワーが保障される専門人材を含めて必要であって、非常に重要なことかなと改めて思いました。

○ 上田構成員

よくまとまっている資料だと思います。私が申し上げたいのは、まとまっている資料を前提としてお話をしたいんですが、市長の基本構想との連動性から、稼げる

まちにするためには、企業誘致をしていこうということを強く言われています。企業を誘致をするということは、北九州市が人を受け入れるということだと思いません。大綱の冒頭に書かれてますように、このまちは5市合併をして、いろいろな方を受け入れられる素地があることは間違いないことです。その中で大切なのは、教育だと思っているんです。人を受け入れても、やっぱりそこに定住をしてもらうということが大切だと思いません。定住をしてもらうことになると、夫婦そろって子どもと一緒にこのまちに住むということだと思いません。その時に一番必要なのは、教育がどうなのかというのがご両親の一番の関心事項ではないかと思いません。その中で北九州市は、教育において1歩先の価値感というのを鮮明に出されて、一言二言で北九州市はこういう教育してるんだよということが鮮明に出てくると、より良い提案になっていくんじゃないかなと思います。何をもってそうしていくかということについては、また議論させていただければと思っております。

○ 教育次長

本日は、たくさんの貴重なご意見をありがとうございました。

最初に教育長の方から魂を吹き込むというお話をしていただきましたけれども、アンケートなどをもとに、今後のプランに魂を吹き込むときのキーワードを、今日いただいたと思っています。やはり地域との繋がり、地域丸ごとで育てていくということが、北九州市のプランの特徴になるのではないかな。それが1歩先の価値観が鮮明になることで、教育がまちの魅力化に貢献できるのではないかな。そして何よりですね、やはり子どもたち、それから先生方が安心安全な中で、よりよい教育をしていくためには、持続可能な個別支援であったり、子どもたちの相談環境、安心して過ごせる学校づくりを推進していくことが大切だというご意見いただいております。

学校現場もですね、本当にそういった教育を目指して日々取り組んでおりますので、皆様の意見をもとに、学校がそういった子どもたちを育てられるような、その基盤となるようなプランに仕上げたいと思っております。本日はありがとうございました。

○ 教育長

本日は貴重なご意見ありがとうございました。構成員の皆様との議論のスタートが、上田構成員からの「登下校が怖いという子どもがいるのは、大人の責任だ」というところと、あと、やはり学力体力という部分で、学力が5年前から劣っていると感じている教員が多いという問題点を指摘していただいて、そこから、コミュニケーション力だとか、様々、皆様にご指摘いただいて、確かに泉構成員もおっしゃられた、結果的に大人も子どもも含めて、学校のウェルビーイングというのは、どれだけ大切かということプランの中でもう少しははっきり書き込めたらというの

は感じたところであります。

最終的にまた上田構成員に戻って、1歩先の価値観をいかに打ち出すか、やはり北九州市だからこそ、こういう教育ですよってことが言える形をどうこれから打ち出すかというのは、重い課題であると感じました。本当にありがとうございました。

○ 眞鍋座長

ありがとうございました。本日の議事は以上となります。

最後に1点だけ、皆様のご意見を伺いたいところがあります。これまで3回の会議で皆様からたくさんのご意見、ご議論いただいて、皆様の意見をできる限り反映して練り上げて、新しい教育大綱ともできるだけ整合性を取る形で進めてきて、かなり完成に近づいてきているのではないかと、改めて感じました。

つきましては、5月に会議を開催して、パブコメにかけるための最終案をまとめることにしていたのですが、今のプランの完成度とか、それから皆様お忙しいと思いますので、効率的な会議運営の必要性ということで、次回はメール等で資料をお送りして、ご意見いただくような書面開催に変更して、私と事務局が責任を持って最終案を皆様にお送りした上で、意見をいただいて、パブコメにかけるという段取りで進めたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。それでよろしいでしょうか。

(異論なし。)

8 問い合わせ先

教育委員会総務部企画調整課

電話番号 093 - 582 - 2357